

2024年11月20日
日本リアリズム写真集団
代表理事 英 伸三
代表理事 中村梧郎
代表理事 足立君江
代表理事 中島英吉

報道・写真関係者各位

第3回伊藤知巳写真賞 決定のお知らせ

豆塚猛さん「ピカドンのドンが聞こえなかった人々」

日本リアリズム写真集団（以下JRP）は、第3回伊藤知巳写真賞を、豆塚猛さん（京都府京都市在住）の「ピカドンのドンが聞こえなかった人々」（モノクロ・30枚組）に決定しました。選考委員（松本徳彦、桑原史成、大石芳野、英伸三、中村梧郎、尾辻弥寿雄の各氏）が10月14日に22作品の選考を行い、第1次選考で9作品に絞り、伊藤知巳写真賞および2作品を奨励賞岡田治さん（和歌山県田辺市在住）「八重さんとネパールの小学校」（モノクロ・30枚組）と宮崎悦子さん（奈良県奈良市在住）「鹿の郷（くに）—コロナ禍の奈良」（カラー・30枚組）—に選出しました。全国20名から22作品の応募があり、男性11名、女性9名。カラー15作品、モノクロ5作品、混合2作品でした。協賛：現代写真研究所

第3回伊藤知巳写真賞の選考経過と決定理由 英伸三

伊藤知巳写真賞は、取り組んだテーマを掘り下げながら、説得力のある作品に仕上げていく撮影者の努力を奨励するため、JRP 会員、現代写真研究所在籍者、卒業生、「視点」展入賞、入選者を対象に2020年に創設された。第3回は山形、東京、茨城、神奈川、栃木、千葉、群馬、埼玉、長野、三重、京都、大阪、奈良、和歌山、高知の15都府県から20人、22作品の応募があり、10月14日、JRP 会議室で選考委員に招いた写真家の松本徳彦、桑原史成、大石芳野の三氏と JRP 選考委員の中村梧郎、尾辻弥寿雄、英伸三の6名で審査を行なった。

まず6人の選考委員がそれぞれ1点30枚組の22作品を、1点1点テーマの内容と写真表現について審査して9点を選出、その中からさらに4点を最終候補作品として討論を重ねた。その結果、豆塚猛さんのモノクローム作品「ピカドンのドンが聞こえなかった人々」を第3回伊藤知巳写真賞に決定した。

作品は、長崎で被爆したろうあ者たちと向き合い、その日常を追ったもの。35ミリカメラでは存在が写らない気がすると、6×6判カメラを携え、10年間京都から通って撮り続けた。被爆、耳が聞こえない、話せないという三重苦を背負った人々が、手話で原爆投下時の惨状と平和の大切さを語る表情は、豆塚さんの最初の予想に反して明るく楽天的、彼らの笑顔で明日に生きるというろうあ者の強さを映像化しようとする方針を大転換して取り組んだのだという。合間に挿入された長崎の街の美しい風景が、多難な人生を生き続けた彼らの心情に光を添えている。

次点、奨励賞に選ばれたのは岡田治さんの「八重さんとネパールの小学校」。2006年にネパールの寒村に小さな小学校を建設した八重さんと、村の子どもたちをめぐるモノクローム作品。タイトルの八重さんと学校の描写は断片的だが、子どもたちを捉えた写真は現地の生活環境を反映した素朴さと、生きる力を輝かせた瞳が印象的。八重さんへのメッセージだろうか、こんにちは、ありがとうの文字をひらがなとローマ字で書いた紙片を持つ少年は、しっかりと学び、今頃はりっばな若者に成長していることだろう。

同じく次点、奨励賞は宮崎悦子さんの「鹿の郷（くに）—コロナ禍の奈良」。ふだんは奈良公園や周囲の山間部で暮らしている鹿が、コロナ禍の外出自粛で人影の消えた街に境界を越えて群をなして出没、その行動を追った作品である。大通りを我が物顔に歩き、ブランコのある公園で草を食み、アーケード街にたむろして買い物客を通せんぼし、住宅地まで遠慮なく進出、鹿島神宮から神様を乗せて春日大社に連れてきてくれた鹿様だからと、それらを自然に受け入れている年季のはいった奈良市民の鹿との付き合い方の姿がおもしろい。

なお、次の6作品がノミネートされた。田中睦子「ギネス登録世界最高齢現役理容師物語」、千葉洋「生き方の行方」、岡田治「あがらのほまれ」、中西篤行「近所の田んぼ」、とみたやすよ「新宿 A、BU、KU（あぶく）」、白鳥恵靖「牛と飼料畑を守りたい—三代目都市酪農家・金谷雅史」。 (応募順)

作者のプロフィール・受賞の言葉

伊藤知巳写真賞「ピカドンのドンが聞こえなかった人々」(モノクロ・30枚組)

まめづか たけし
豆塚 猛



1955年奈良県生まれ。近畿大学農学部水産学科卒。
20歳から23歳までJRP在籍。
1983年から1985年まで(株)サンデザインカメラマン。
1985年からフリーランス。
1985年小樽で写真展「手話と手仕事の詩」
1988年長崎と京都で写真展「Nagasaki Today」
2001年写真展「21世紀に20歳になる青年たち」
写真集として「ドンが聞こえなかった人々」文理閣出版
「季節の色遊び」文理閣出版。ろう運動家のレジェンドを撮った「道」全日本ろうあ連盟出版部など
2021年JRP復帰。視点展22年奨励賞、23年視点賞受賞。

光陰矢の如し。伊藤知巳さんに大阪で叱咤激励を受けたのは47年前。炎のようなリアリズム論を氏から浴びる、20歳そこそこの私がいた。

長崎の手話通訳者と出会って、耳の聞こえない被爆者の聞き書き調査のことを知り、記録が欲しいとの要望と、カメラ小僧のリアリズム魂が疼き、手弁当で長崎通いが始まった。彼らの存在感に負けないようにカメラを6×6判に変え、彼らと向き合う日々。手話で語ることは、語るだけでは終わらない。新しい動きやろう者の変化、発達に目を開かれる事になった。彼らは平和の語り部となり、被爆者手帳のない者は取り組みによって、手帳が交付された。課題のある所に運動あり、運動のあるところに写真あり、を実感する。まさにドラマを見ているような日々だった。

来年は被爆80年。関わった被爆者はほとんど亡くなってしまったが、彼らの残した鮮烈なメッセージは生きている。

被団協のノーベル平和賞と合わせて今、彼らの平和へのメッセージはますます大切なものになっていく。受賞にあたって、伊藤知巳氏との縁、長崎のろうあ者と手話通訳者に感謝する。

奨励賞 「八重さんとネパールの小学校」(モノクロ・30枚組)

おかだ おさむ
岡田 治



1960年生 和歌山県田辺市在住
受賞歴(抄)
2016年アサヒカメラ年度賞1位
2017年第23回酒田市土門拳文化賞奨励賞
2024年第30回酒田市土門拳文化賞奨励賞ほか
写真展
2017年 田辺市なかへち美術館にて作品展「お良さん」
写真集
2017年 作品「お良さん」出版 日本写真企画
2024年 JRP 入会

作品「八重さんとネパールの小学校」は、私の友人である八重さんが2006年ネパールに建築したことに関心を持ち、八重さんと共にネパールに同行し、建築された小学校や子供たち、八重さんの引き続き続けられた支援を取材し作品作りを続けてきました。小学校が建設された2006年はネパールの王制廃止がなされ国内が激変していた頃であり、小学校建設後もネパール地震からコロナに至るまで、八重さんの活動はまさに激動の中において教育支援を続けてきたと言えるのではないか。この作品に対して今回伊藤知巳写真賞奨励賞を受賞出来たことは、八重さんの活動を今後広く知って頂くという上で、重要な価値が付加されたものと考えています。

奨励賞 「鹿の郷（くに）ーコロナ禍の奈良」（カラー・30枚組）

みやざき えつこ
宮崎 悦子



1976年生
奈良市在住
2012年 全国公募写真展「視点」優秀賞
2013年 全国公募写真展「視点」優秀賞
2019年「なら時間」個展 オリンパスギャラリー大阪
2013年「東京ラブソディ」印刷・製本(株)関西共同印刷
2017年「なら時間」現代写真研究所出版局、印刷(株)東京印書館
2012～2013年 日本リアリズム写真集団付属 現代写真研究所「日曜撮影専科」受講
2012年 JRP 入会

この作品はコロナ禍の時期でとても大変でした。感染防止・移動制限などのコロナ禍であるが故の写真撮ること自体の大きさ、自身の健康不良、お店の営業を続ける困難さとの闘いの三重苦でした。しかしふと外を見ると、基本的には奈良公園から出ない鹿たちが街中をうろついています。しかも集団で…。普段から身近なものを撮ることを心がけていたので、自分の近所が鹿の郷(くに)であることに感謝して、撮影を開始しました。もちろんいつでもどこでも鹿たちが街中をうろついているわけではないので偶然出会ったら、バイクを置いて、鹿たちを走りながら追いかけてきました。また雄鹿の角に刺されたり、前足で蹴られたりや覚悟しながら、前から近距離で撮ることを頑張りました。幸い事故は起こらなかったですが…。

伊藤知巳写真賞創設の目的

写真評論家伊藤知巳氏は、日本リアリズム写真集団の創設期から評論家として、理論と創作活動をしながら組織の拡大を目指す“創造と運動”を方針に掲げる JRP で、写真に対する情熱を持続させることを説きました。また、伊藤氏が重視したのは時代を鮮明に捉えた作品、写真の本来の役割である記録性と、見る者の感性をゆさぶる力を持っている作品で、常日頃写真家に求めたのは一生を通じて追求する課題を、主体的に自分のテーマとして確立することでした。

最近発表される作品は、大きな問題に真正面からぶつかった強いメッセージを発したものが少なく、組写真を主とする「視点」展も、8枚が上限であるためかこじんまりまとめられて、枚数の寸法に合わせた限定的なテーマ内容の傾向があります。30点としたのは、せっかく取り組んだテーマをさらに掘り下げ、新たな問題を発見しながら、本質に迫る説得力のある作品に結実させていく作者の可能性に期待するからです。

伊藤知巳氏プロフィール

- 1927年 東京に生まれる。
- 1950年 土門拳氏助手。
- 1955年 アルス「CAMERA」編集長。
- 1957年 フリーの写真評論家として独立。
日本写真批評家協会の設立に参加。
- 1960年 日本ジャーナリスト会議写真支部結成に参加。
- 1965年 日本リアリズム写真集団に入会。
- 1967年 日本リアリズム写真集団事務局長。
- 1974年 日本リアリズム写真集団附属「現代写真研究所」の設立に参加、教務主任になる。
- 1983年 「土門拳記念館」設立準備委員、顧問。
- 1986年 山形県酒田市で心不全のため逝去。享年58歳。

東京総合写真専門学校、東京造形大学、桑沢デザイン研究所などの教授を歴任。「ヒロシマ・ナガサキ」（日本原水協）、「若きウタリに」（研光社）、「土門拳全集」（小学館）、「世界」グラビア（岩波書店）等の編集を担当。

授賞式・写真展の開催

写真展会場QRコード

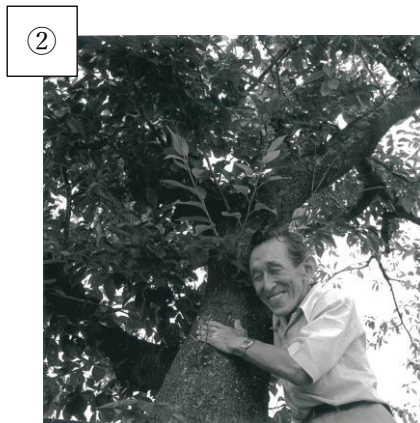
日本リアリズム写真集団は、第3回伊藤知巳写真賞写真展を2025年6月3日(火)～6月30日(月)、新東京ビル・丸の内フォトギャラリー(2F)、アートスペース丸の内(1F)で行います。伊藤知巳写真賞の全作品と、奨励賞の抜粋作品各数枚が展示されます。授賞式は、6月8日(日)東京都美術館講堂において、JRP総会の中で行います。



画像の紹介

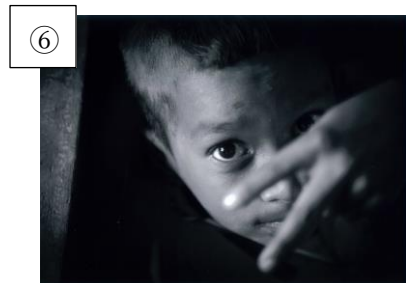
画像が必要な場合は、この中から番号を選択し、問合せ先にメールでご請求ください。

伊藤知巳写真賞 画像「ピカドンのドンが聞こえなかった人々」(モノクロ)(1枚ごとに写真説明あり)



- ① 山崎栄子 2004年の長崎原爆慰霊祭で「平和の誓い」を手話で話す
- ② 菊池 司 3.1キロ被爆。ろう学校跡地の被爆桜は生きていた
- ③ 菊池は平和の尊さを訴え続ける、現代の語り部になった
- ④ 榎園和子は目が見えないので、手話が見えない。触手話や文字を手に書いて話す
- ⑤ 後山とし子、15歳、西山町で被爆。生活苦と子供の死、苦勞の連続だった。

奨励賞 画像「八重さんとネパールの小学校」(モノクロ)



奨励賞 画像「鹿の郷(くに)ーコロナ禍の奈良」(カラー)



問合せ先

日本リアリズム写真集団
(JRP) 事務局 関雅之
〒160-0004
東京都新宿区四谷 3-12
沢登ビル 6F

TEL : 03-3355-1461
FAX : 03-3355-1462
mail : jrp@jrp.gr.jp